



みやした かずひろ
宮下 和夫

道徳科学研究所
副所長



たち き のり お
立木 教夫

道徳科学研究所
客員教授



たけ なか しん すけ
竹中 信介

道徳科学研究所
研究員



そう なか まさ
宗 中正

道徳科学研究所
副所長



おの まさ ひで
大野 正英

道徳科学研究所
研究主幹

**最高道徳を標準とした研究こそ
この研究所で取り組む意義がある**

宮下 モラロジー道徳教育財団の創立者・廣池千九郎が著した『道徳科学の論文』の第三緒言では「将来モラロジー研究所において引き続き研究を必要とする諸項目の概要」として、三十四項目の研究課題が挙げられています。これは道徳科学研究所（以下、道科研）にとって重要な意味を持つものであり、以前からさまざまな取り組みがなされてきました。

そして創立百周年を目前にした今、この課題に対するこれまでの取り組みと、今後どのような形で研究を進めていくかについて整理しておこうということで、二年越しのプロジェクトとして取り組んでいる最中です。

この取り組みを通じて考えていること等、まずは宗さんからお話しいただけますか。
宗 第三緒言の第一条に「破天荒の困難事業」(新版『論文』①序二七頁)という言葉がありますが、ここに破天荒(前例のない)とある意味を考えることが、最高道徳の特性や課題を理解することにつながるのではないかと思っています。

廣池博士が注目された精神作用の重要性や、知徳一体ということ、あるいは道徳の根

源を「宇宙の現象とそのはたらき」に置くという考え方は、確かに知的探究としても破天荒なのですが、どのように取り組めばその「破天荒」な課題を達成できるかを考えたときに、私が行き着いた答えは「慈悲心を持つて研究を行う」ということでした。それは「最高道徳(慈悲)を標準として研究を行う」ということでもあるかと思えます。

宮下 「世界諸聖人の事跡に関する研究」の項に「かかる研究は従来すでに世界の諸大学にて行い来たれるところなれど、いま、モラロジー研究所における研究の目的は、従来の学者の漫然たる目的の下に各自の私見を混じって研究するものとは、おのずからその趣を異にするものなれば、これを他の学者の研究に一任して止むことは出来ないであります。

されば、私の研究所においては引き続きこの大研究に着手する予定であります」(新版『論文』①序一三七頁)とあるように、廣池博士は重要な目的と独自の方向性を持った研究を後世に託しているわけです。われわれはそういう研究を進めていかなければならないのだと思うと、身の引き締まる思いです。

財団の研究部門では、これまでも多くの先輩方がこの課題に取り組んできたわけですが、立木先生はどうご覧になっていますか。

将来モラロジー研究所において 引き続き研究を必要とする諸項目の概要

(新版『道徳科学の論文』第三緒言 第二条より抜粋)

- (1) 生物及び人間の生命の連絡に関する研究
- (2) 自然力の人間に及ぼす影響と一般生物に及ぼす影響との比較に関する研究
- (3) 自然力と人間の道徳との関係の研究
- (4) 社会感化力の研究
- (5) 一代獲得形質の研究
- (6) 精神遺伝の研究
- (7) 社会遺伝の研究
- (8) ゴッダード博士(Dr. Henry H. Goddard)の『カリカック家』(The Kalikak Family, 1912)の研究のごときものをはじめとして、このほかに広く世界的にこの類の材料を収集すること
- (9) ポペノー、ジョンソン共著『応用人種改良学』(Paul Popenoe and Roswell Hill Johnson: Applied Eugenics)に引照せられてあるところの米国ワシントン市の系統記録所(Genealogical Record Office)の仕事のごとき結果と道徳との関係の研究
- (10) 実験心理学における精神作用と肉体との関係についての徹底的研究
- (11) 特に道徳・信仰及び肉体の相互関係の研究
- (12) 道徳・信仰及び寿命の相互関係の研究
- (13) 動物試験所を置いて特に動物の憤怒・喜悅・驚愕きょうかくその他の精神作用のその疾病・健康及び寿命に及ぼす影響に関する研究
- (14) 研究所の財力に余裕を生ずる場合には、植物試験所を置いて、進化論及び遺伝学の研究をもなすこと
- (15) 精神作用と伝染病との関係につきての研究
- (16) 人類学的及び文明史的に道徳及び信仰の価値を徹底的に研究すること
- (17) 犯罪者と道徳教育との徹底的研究
- (18) 骨相学と道徳との関係に関する徹底的研究
- (19) 親孝行より生ずるあらゆる結果に関する研究
- (20) 博愛科学の研究
- (21) セツルメント・ワーク(settlement work (隣保事業))の研究
- (22) 法律学の原理(正義)と諸聖人の精神(慈悲)との調和及びその応用に関する具体的方法の研究
- (23) 労働問題の道徳的解決に関する研究
- (24) 政治学及び法律学の原理に関する徹底的研究及び政党の道徳化に関する具体的方法の研究
- (25) 世界永遠の平和の実現に関する具体的方法の徹底的研究
- (26) 中流以上の学問もしくは才知ある人の子孫に比較的多くの心身障害者ある理由の研究
- (27) 人種改良学・環境改良学及びモラロジーの原理を調和して人間を変化せしむる具体的方法の徹底的研究
- (28) 日・時・方角の吉凶及び干支えとの関係、特に丙午婦人ひのうまに関する伝説の実否いかん、及び以上の事実と道徳との関係についての研究
- (29) スマート(William Smart)の『一経済学者の反省』(Second Thoughts of an Economist, 1916)に関するごとき道徳的経済学の完成に関する研究ならびにモラロジーに立脚する新経済学の建設に関する研究
- (30) 人口問題・食糧問題・移民問題及び道徳の相互関係における研究
- (31) 世界各国において今日存続せる旧家と道徳との関係、すなわち万世一系の家、積善の家及び積不善の家の運命に対する調査。ただしこの調査は日本・朝鮮・中国・インドその他アジア諸国より欧州各国・両米各国にわたりて精密の調査をなすこと
- (32) 興隆期の家と衰運期の家との状態の調査
- (33) 世界諸聖人の事跡に関する研究
- (34) 最高道徳によるところの人心の開発もしくは救済実行の結果に関する帰納的調査



めなければならぬということ。宗さんが言う「最高道徳を標準として研究を行う」とは、そういうことではないかと思えます。

創業者の先見性から 何を学ぶのか

大野 三十四項目の内容を具体的に見ていくと、特に自然科学の分野では進歩が著しく、『論文』が書かれた当時とはだいぶ状況が変わってきていますし、人権上の問題等で研究自体が行われなくなった分野もあります。ですから、現代の研究としてはストレートに扱にくい面もあるのですが、道科研の研究者は、常にこれらの課題を念頭に置いてきたことは確かだと思います。

立木 この三十四項目の中にはいろいろな事柄が含まれていますが、それをどのような観点から研究するかが重要だと思います。廣池博士の研究には、まず最高道徳的な宇宙観や世界観があって、それをサポートするような基礎的な知識を科学において固めていったという色合いがあるわけです。それが深まっていくと逆のアプローチも可能になるのだと思います。まず「最高道徳を実行すれば運命が良くなる」ということが保証される世界観を背景として、自然科学的な知識を紡ぎ上げていった感じがしますね。

ですから、単に「自然力の人間に及ぼす影響」といったことだけを追究しても、最高道徳的な研究にはなりません。廣池先生の宇宙観や世界観をきちんと押さえた上で研究を進

ここでは非常に大きな課題を設定している項目と細かく絞り込んだ項目が横並びになっていて、一見不自然に思えるところもありますが、そこには廣池博士の「こういう議論を展開したい」とか「この点についてもっと説得力のある証明をしたい」という意図があるわけです。また、三十四項目の中には基礎研究が多い点でも「モラロジーを社会に対して説得力を持って主張できるように学問的な裏付けを確立したい」という廣池博士の思いが伝わってくるように思います。

宮下 この三十四項目は自然科学分野の研究を多く含んでいるという特徴もありますね。

立木 自然科学分野については、廣池博士は素人だったと誤解されている方が多いのですが、実は明治三十六、七年頃に穂積陳重先生ほづみのふしげのアドバイスを受けて、東大の理学系や工学系、医学系、農学系の研究室を回り、自然科学の素養を身につけておられるのです。

大野 当時としては最先端の学問を取り入れられている。後に続く私たちにも、そうした意識が必要ですね。

立木 そうですね。博士はそういう努力をした上で『論文』を書かれたわけですから。

ここで挙げられている自然科学分野の課題に注目すると、時代の変遷の中ですでに解決した問題もありますが、今なお課題として残っている事柄も結構あります。

大野 例えば骨相学というのは、現代では意味がない学説とされていますが、脳科学の面の発想としては面白いですよ。

立木 頭蓋で考えたことが、大脳皮質に影響を及ぼすわけですね。それから性相学についても、現代ではコンピューターを使って表情を解析する研究等が進んでいます。ですから骨相学というと、現代の学者には「科学ではない」と言われるでしょうが、そこで問題に

していた事柄のエッセンスを引き継いでいる研究は、現代にもあるような気がします。「人間の精神の在り方が顔に出る」といったことは、科学的なアプローチとしては問いと結論の間がものすごく遠いように思えますが、直感的に「ここに問題がある」と考えて問いを立てられたのでしょうかね。

中にはゴッダードの家系の研究のように、現代では問題があると見なされている研究についても言及していますが、これは科学が犯した過ちを反省する材料として、科学史的には優生学と並んで重要な研究分野でもあると思います。この見方の何が間違っていたかということは、医学的にも社会学的にも重要な問題ですよね。

大野 優生学なんかは特に大きな社会現象を引き起こしましたからね。

立木 今では生殖補助医療が行われていますが、これには優生思想が入りやすいですね。
大野 廣池博士の時代には考えもつかなくなってきたようなことが、新しい倫理的な問題になってきているわけですね。

立木 当時はまだ遺伝子の研究が進んでいなかったのですが、廣池博士はすごい展望を開いていたと思います。博士が使われた生物学関係の書物は、ほとんどが優生学者の書いた

ものですが、ご自身は優生学の呪縛を免れたようなところがあって、正しく人間を見ていましたね。

科学的な説得力をもって

道徳実行の因果律を説くために

宗 道徳実行の効果を実証的に研究するためには、何が私たちの運命に影響するかを明らかにする必要がありますが、そこで「何が良くて何が悪い」という区別を立てようとすると、差別や偏見などの人権に関わる問題が必ず出てきます。『論文』に述べられている精神作用の重要性や慈悲心は、この難題を超えるための鍵でもあるわけですね。

この第三緒言を読んでいると、大事だと思っただ点がいくつもありました。第一に学問とし



て組織することはできただがまだ端緒にすぎず不完全であること、第二に研究範囲が広く複雑微妙で非常に難しいこと、第三に質の高い道徳を普及して人類を安心・平和・幸福に導くことが急務であること、そして第四に研究と教育を一体のものとして取り組むことの重要性です。特にこの三番目と四番目は、今後研究・教育を進めていく上で大切な点ではないかと思います。

大野 そうですね。重要なことは、この三十四項目をそのまま現代の研究課題にすることはできないけれど、廣池博士がここで何を狙っていたのかをくみ取って、現代ではどのようなアプローチができるかを、一人ひとりの研究者が考えていくことだと思います。そういう視点で見ると、博士は一つ一つ面白い問題を立てられているなと感じますね。

立木 私はこの三十四項目の記事が『論文』完成の時点で急に出てきたわけではなくて、それより先にこんなプランがあったという経緯がつかめたら面白いなと思って、資料を探ったところ「モラルサイエンス研究所の研究の項目」という遺稿が見つかりました。

竹中 『論文』の本格的な執筆の前、構想の段階で書かれたものということでしょうか。

立木 だいたい大正八年から十五年の間と思

われますから、脱稿に近い時期に書かれている可能性もありますが。いずれにせよ、これは三十四項目につながる研究だと思えます。

一番目に挙げているのは「長寿の研究法」。二番目は「健康と道德の関係」。三番目が「疾病と道德」。それから四番目は、三十四項目にもある「精神遺産と社会遺産の研究補足」です。十分ではない部分を補足する研究が必要だと思つてこのように書かれたのでしょうか。

五番目は「一代獲得性遺産、ありや否や」。これは非常に充実させて研究されましたね。六番目は「老年の子、果たして健なりや否や」。七番目が「病氣遺産の研究補足」。八番目が「中国古代病理学及び医薬に関する新研究」。九番目が「孝行と出世との関係」。十番目が「投機業、古物商及び良風、美俗を害する商業家の末路の研究」。これは研究倫理に抵触しそうで、現代では扱いが難しい気もしますが……。

十一番目が「事業に最高道德の精神がこもるときには、その事業が物質の価値以上の価値を発揮するという研究」。十二番目が「人心救済と事業繁栄に関する研究」。十三番目は番号のみが記してあり、内容は書かれていません。

この遺稿を踏まえると、『論文』執筆の時

点では材料が足りず、補足的に研究してほしいと望まれたことが、第三緒言の三十四項目に挙がっているのではないかと思えます。また、聖人研究のような長期的展望をもった研究もありますよね。そして人間の病氣の問題に道德科学として取り組む際は、生物学的な問題に還元して研究する必要があるということ、項目が広がった可能性も見えてきます。

大野 根本は「道德を実行すれば幸福になる」という因果律を、いかに説得力をもって主張するかという点でしょうか。そのためには科学的な基礎を固めなければ……。
竹中 つまり一見最高道德とは関係がなさそうに見える科学基礎論の部分が、最高道德論に直結してくるということですね。

■ 創立者の意図をくみつつ 新たな課題にどう取り組むか

宮下 この三十四項目をめぐる社会科学分野の取り組みとしては、いかがでしょうか。

大野 難しいのは、社会の制度や体制が『論文』の執筆当時と今とで大きく異なる点です。例えば憲法が変わったことや、日本が世界有数の経済大国になったこと、あるいは家族や国家に対する人々の意識が大きく変わったという背景があるわけです。私の専門の経



済学では「道德的経済学の完成に関する研究」や「モラロジーに立脚する新経済学の建設」が課題として挙がっていますが、まだまだ廣池博士がめざしたところまでは届きません。

ただ、経済学にしる経営学にしる、博士の時代よりも道德的・倫理的ということに対する世間的な意識が高まってきているのではないのでしょうか。この財団や麗澤大学がそうした方面の研究をリードしてきたことは、誇つていいところかなと思つています。

宮下 自然科学分野は補足研究によって基礎を補強する意図が見えるのに対して、社会科学分野の項目は「具体的方法の徹底的研究」といった文言が特徴的です。これは新しい問題にどう対応するかについて、社会科学的



な視点から提言せよということでしょうか。

大野 廣池博士の時代は労働問題が社会に与える影響が大きかったのだと思いますが、今は当時とはまた違った形で貧困等の問題が起きています。また、博士が「新経済学の建設」を課題とされたのは、自己利益を追求し過ぎる経済の在り方には問題があるという考えからでした。今でも一部の富裕層にお金が集まり過ぎるとか、強欲資本主義といわれるような事業の在り方には批判があるわけですから、現れている現象自体は変わっても、本質的な問題は共通しています。ですから現代の文脈において、研究者がどのように課題を設定し、具体的な問題をいかに解決するかが問われているのだと思います。

三十四項目の中には家の運命に関すること

が含まれていますが、これも時代が変わった今では一般的な研究テーマとしては挙がってこない事柄です。逆に「こういうテーマを扱うのがモラロジーの特徴」ともいえますが。

竹中 今は子供を持たなくてもいいという人も増えてきたように、永続に対する期待感が薄れつつあるのではないのでしょうか。

永続に通じるテーマは、現代的に言えばサステナビリティですが、日本人は地球環境問題に対する関心が薄いといわれています。歴史に見れば、日本には古くから伊勢の神宮の「常若の思想」やサステナビリティの文化があったわけですが、現代では関心が薄れてきたというのは興味深い事実でもあります。こうした新しいテーマをモラロジーではどう捉えるかという点も重要だと考えます。

宮下 つまり、三十四項目の研究課題にさえ応えたら道科研の役割を果たしたことになるわけではなくて、この三十四項目の背景にある博士の意図をくんだ上で、『論文』の内容を捉えながら展開しなければならぬ現代的研究課題もたくさんあるわけですよ。

大野 廣池博士の言葉に「大勢に善きものと、悪しきものとあり。大勢に逆行または順応するものは滅ぶ。順応しつつ真理を守るもの残る」とありますが、やはり不変と可変を

いかに見極めていくかが、研究者に突きつけられた大きな課題であると感じています。

私が今、特に関心を持っているのはAIの問題ですが、遺伝子改良や生殖医療も含めて、廣池博士の時代にはまったく想定されなかったような問題も現実に取り組み、意識し私たちがそうした問題に取り組む際、意識しなければならぬのは「もし廣池博士が現代に生きておられたら、この問題をどのように考えるだろうか」ということです。私自身も「自分はこういうことを書いているが、廣池博士の考えからずれていないだろうか」ということが常に気になりつつも、何かしらの答えを出さなければと葛藤しています。

もう一つは、こうした研究を実際の社会教育や生涯学習にどうつなげていくかが、今後の道科研にとって大きな課題だと思います。

宗 三十四項目の研究課題が提示されているのは第三緒言の第二条ですが、第三条と第四条では教育と普及ということにも触れられていますね。『道徳科学の論文』を学ぶ上での課題を研究の立場から整理して、これを生涯学習の現場に還元することができたら、研究と教育が相互補完的に進んでいくのではないのでしょうか。

「研究」と「教育」「実践」が 一体となって前進していくために

宮下 間もなく創建から百年を迎えるモラロジーを、学問的に前進させた上で現代的に展開するには、改めて何が必要でしょうか。

立木 やはり『論文』をしっかり読んで、ゆくゆくは廣池千九郎関係資料についても多くの方々と共有しながら、誰もが勉強できるような環境をつくっていく必要があると思います。深く学びたい方には研究的な教育のプログラムを提供して、勉強の進んだ人たちを巻き込んでいくと、全体がレベルアップしていくのではないのでしょうか。

宗 冒頭で述べた「最高道徳を標準として」ということが重要なのは、モラロジーを学ぶ



立場の人にとっても同じだと思えます。ある「道徳的行為」を行うときだけでなく、勉強を含め、すべての行いにおいて慈悲であるように心がけ、最高道徳を標準として物事を考える必要があるということです。ですから、モラロジー団体全体として最高道徳(慈悲)を学ぶ意識を高めていくことが大切ではないかと考えています。

大野 維持員の方々には、この教えにきちんとした研究の裏付けがあることを知っていただいて、まずはその点に自信を持っていただきたいですね。同時に『論文』のタイトルにも「新科学としてのモラロジーを確立するための最初の試みとしての」とある通り、道徳科学がすでに出来上がったものではなく、現在進行形としてどんどん進化していくものであるというふうにも廣池博士が捉えておられたことを、お互いに再確認できたらと思います。

竹中 まずは三十四項目の全体を読んでいただいて、ぜひ多くの方から「私は廣池博士の意図をこのように受け止めた」という声をお寄せいただければ、ありがたいですね。

宮下 二月の道徳科学研究フォーラムでは、三十四項目をめぐる取り組みに関する報告も行いますので、ぜひ多くの方に参加していただければと思います。



撮影=能仁広之